

地球科学研究者の使命

田口雄作¹⁾

1995年1月17日早朝兵庫県南部を襲ったM7.2の大地震は、私たち地球科学研究者にとって衝撃的な出来事でした。5万人に達するかという死傷者の数、10万軒以上の家屋の倒壊、300カ所に近い火災発生という膨大な数字も確かにショックではありましたが、それよりも、近代的な科学技術が自然の力に対していかに無力であったかという衝撃は、生涯忘れることのできないものとなりました。

都市直下型地震が神戸市を襲う可能性の高いことは、既に今から14年も前に本所発行の5万分の1地質図幅「神戸地域の地質」(藤田・笠間,1983)において、ハッキリと指摘されていたにもかかわらず、ほとんど注目されることなく見過ごされてきていたのです。もし、私たちがもう少し真面目にその指摘に耳を傾け、対応策を講じていたとしたら、被害はもっと少なくすんでいたかもしれないのです。

不安を煽るようですが、わが国のような地震国では、被害を伴う大地震はいつでもどこでも起こる可能性があると考えておかなければなりません。場所が特定できる火山の噴火でさえ十分に予知できているとはいえない現状では、場所も時間もその規模も特定できる地震予知など、到底期待できそうもないと思うからです。

地震予知研究は重要ですが、息の長い地道な仕事で、それが実用化されるのは、かなり遠い将来と考えざるをえません。そうであれば、焦点は私たちが当面考慮すべき一つの共通認識に絞られます。すなわち、地震はいつかは必ずやってくるものであり、地震に強い都市づくりや都市地盤の基礎研究、地震発生後の救援対策をすべてに優先して、日頃から十分に検討しておく必要があるということです。

折しも、日本学術会議阪神・淡路大震災調査特別委員会がまとめた最終報告には、「これまでの成果では精度の高い短期予知は不可能」で、「地震発生後の被害軽減を目指す基礎研究への転換」が強

調されていると大きく報道されました(朝日新聞東京本社1997年6月10日付け夕刊3版, 第一面記事)。さらに、追い打ちをかけるように、6月27日開催された測地学審議会でも、これまでの柱であった地震の直前予知研究の事実上の棚上げが了承されました。

ここで、私たち地球科学研究者の果たす役割は、きわめて重要になってきたと思います。すなわち、これまで学術研究分野として、あまり重要視されてこなかったくらいのある都市域の地質、地盤、水文等に関する地球科学的研究にもっと力を注ぐべきだという点が浮き出てきます。恐らく多くの地質学者にとっては、沖積層を主体とする都市域よりも、カラフルに地質の変化を表現できる地域の地質図作成の方が、きっと面白いに違いありません。事実、これまでに発行された本所の地質図で都市域を扱ったものは、まだ十分とは言えないのが現実です。

わが国の人口の約四分の三は都市に住んでいるといわれています。人間活動のノイズが少ない地域の地球科学研究は、私たちにとって大変魅力あるフィールドには違いないのですが、大勢の人間が住む都市域の研究はそれと同じくらい、もしくはそれ以上に重要なのではないのでしょうか。

かの大震災は、罹災者にとって忘れられないきわめて不幸な出来事となりましたが、私たち地球科学研究者にとっては、日頃の研究のあり方を見直す絶好の機会となったことは確かです。

国の地震予知研究の方針が変更される以上、所の方針も当然変更を余儀なくされるでしょうし、私たち地球科学研究者一人ひとりの研究対象も見直しを迫られるでしょう。この機会に、もう一度原点に立ち返って、いま私たちが総力を挙げてやらなければならない緊急的な課題は何なのか、ジックリ見つめ直す価値は十分あると思います。

1) 地質調査所 環境地質部

キーワード: 地球科学研究, 都市域, 地震予知